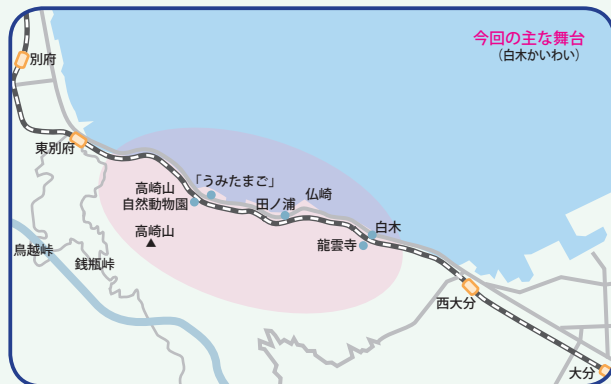


渡辺克己著



第十八章●白木かいわい



奥付け／デジタルブックについて

- ・ 別大道路
- ・ 安倍宗任の後えい
- ・ 鬼の神さま
- ・ 高崎の竜宮さま
- ・ お地藏さま

第十八章 ● 白木かいわい

【写真】 大正初年の
別大道路 仏崎付近

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正初年の別大道路仏崎付近

別大道路

府内の海岸から高崎山のもとにかけて、かつては曲折のある美しい海岸線をなしていた。現在字名などで残っているところをたどってみると、芦崎（浜町）黒崎（臨港線のある付近）宝崎（カンタン電車停留所付近）鯨崎（白木海岸）仏崎（仏崎公園）高崎（田ノ浦）鎌崎（高崎山の突端）とあり、これを府内の七崎と呼んでいた。このみさきとみさきの間が、ゆっくりと湾曲して、変化のある風景を織りなしていたのである。

しかしその美しい風景も、仏崎から先は、海に迫ったガケにはばまれて、往來の難所となっていた。

昔は、別大間の道路は、やがて第二別大道路（バイパス）が建設されるだろうといわれている高崎山の裏側の道、錢瓶峠とか赤松の峠を越す道しかなかった。

最近、城ノ腰付近で、郷土史家の立川輝信さんが発見した大きな石造の里程標には「府中より二里」と刻んであった。府中とは府内のことで、この道が公道であったことを語っている。

宝暦十一年（一七六一年）に、錢瓶峠で境界争いが起こり、江戸表で幕府が直接吟味して処断するという、府内藩にとつては頭の痛い大事件があった。この直接のきっかけは、府内藩が幕府の巡見使を迎えるため、その通り道である錢瓶峠を農民に掃除させていたところ、天領側の赤松村農民が境界を侵したと言いつけ、府内藩農民を襲撃したためであった。つまり幕府のような権力筋が行列をくんで公式に府内にはいつて来るのにも、この峠から城ノ腰を越えるコースが唯一の公道で

あったわけだ。その当時、府内から別府へ行くのに、近道をとろうとすれば、潮が引いたとき、磯つたいにガケの下を急いで通り抜けるか、カンタンから船で直接別府に行くしかなかった。脇蘭室の「仏崎をすぎて」と題する歌に

沖辺より吹来る風に打よする波間を待てすぐる旅人

また貝原益軒の「豊国紀行」に「十三日。別府より船にて府内に行。漕出し後は日和もしづけし。高崎山の麓を行。高崎山は別府の東南の海辺に有。山上に大友の城跡有。陸地を行ば高崎の西の方。赤松嶺をこす。難所なり。…歩行にて行ば、山の東の海辺なる、がけ道を行よし。道細くして危しと云。」

とくに仏崎の下のがけ道は、こわい場所だった。また夜な夜な馬の首が下がるなど恐しい化け物が出るうわさもあって通行人はキモを冷やしていた。そこで駄ノ原の西光寺の住職戒須というお坊さんが、「南無阿弥陀仏」の名号をがけに刻んだと伝えられている。

ところがこの六字の名号が明治の末ごろ「南無妙法蓮華經」の七字のお題目に書き換えられた。竹町の古着屋で奇人のほまれ高いユウケンさんが、日蓮宗を信仰して自費で書きなおしたのだそうである。この魔の難所仏崎は、昭和の世になっても難所の名に恥じず、がけくずれの電車埋没事件で多くの人命をのんだ。最近落石防護トンネルを完成したが、このトンネルで七字のお題目も見えなくなった。

なお別大間の道路ができたのは明治八年。県直営工事で開通した。開通の日、県の役人が二人引き人力車で走って大いに得意がったそうだ。

安倍宗任の後えい

白木という土地は、安部姓の一族でなりたっている。

源氏の奥羽征討に服した安倍宗任の子孫だと土地の人は信じている。いまでこそ海辺は夏場は海水浴場となり、別大国道は四六時中車のはんらんで、白木一帯は世俗の風にさらされているが、国道も鉄道も通らなかった昔は、まったく外界と隔絶した別天地だった。この海と山に囲まれた静寂な土地にその昔、安部（倍）一族が何かの理由で隠せし水入らずの生活を幾百年も続けてきたのだ。

地区の中心は宝珠山龍雲寺。この寺の本堂に安倍貞任、宗任の位はいがまつてある。また山門をはいるとすぐ左手に俗に貞任堂と呼ばれる「心殿窟」があつて、堂内のずし（厨子）の中に貞任、宗任の位はいと貞任像が安置されてある。木彫坐像、風折えぼしをかぶり、右手に中啓を持った、柔和円満な容姿。奥羽に勢威をはり朝命に抗した豪勇貞任を思わせるには個性に乏しい像である。幕末の明和三年（一七六六年）の作だが、それでも二百年の歴史を持っている。

寺の奥に大小の岩くつが二つ。その昔この中に貞任、宗任の位はいをおさめ、これを本堂として寺を創建したと伝えられている。

さまざまな遺物と伝説にいろどられ宗任がこの地に落ち着いたという安倍一党の系譜は守られているわけだが、たしかなことは、弘和三年（一三八三年）南北朝が対立し、国内は血なまぐさい風に吹き荒れている時代に、安倍宗任の末といわれる安

倍貞観という人が江州から一族を引き連れて豊後の白木の里に住し、貞観が竜雲寺の開山となったことである。これより少し前、足利尊氏に組する大友軍が高崎山に城を築き、南朝の菊池軍らと戦って落城するなど、この付近は戦場となっていたのだから、安倍一党はあるいはこれと深い関係があるかもしれない。とにかく世にすねるか、世を忍んでこの地に永住した人々である。

現在は、他の姓の人々が移り住み、地区内は安部ばかりではないが、それでも安部姓は絶対の勢力を持っている。県内の各地に散っている安部姓も、もとを正せば白木の安部から出たものだと、地区の人々は安部姓に誇りをもっている。

もう一つ白木に自慢のものがある。竹の美術工芸では日本的な生野祥雲斎さん。三十余年前にこの地に落ち着いて、竹工芸ひとすじに生きてきた巨匠だ。

生野さんは、石城川内成の出身で、別府に出て竹工芸の修業をし、その天才的な技能を白木の里でみがきあげたのである。逆にいえば、白木の山ふところが、祥雲斎という芸術家を育てあげたのだ。

鬼の神さま

頭痛の神さままで知られた鬼神社は、竜雲寺と細い坂道をへだてて向かい合っている。この神さまも安倍宗任の創建と伝えられ、白木の安部一族の守り神さまのような存在だ。

宗任の母新羅（しらぎ）白木の名はここから起こったという

は幼名を「竜の乙女」といった。(竜雲寺の竜はこれにちなんだという) 宗任は母の死後ほこらを建ててまつたが、豪勇宗任も母の前に出ると別人のようにおとなしかったので、その母を豊後の人々は宗任より強い鬼神だと評判していた。鬼神社の名はそれから出た、というのが神社の縁起だ。

鬼神社は、明治十年ごろまでは、竜雲寺の南の山上にあったのだが、参拝者が多いので現在地に遷座を願った。もとはご神体は御幣だけだったが、社地を拡張するとき、ムクの木の下から土製の鬼面を掘り出したので、これは神さまがお授けになったものにちがいないと、それをご神体にしたという。

頭の病気の人が、鬼の絵馬を奉納して祈ると霊験あらたかと信じられ、現在も参拝の人があとを絶たない。拝殿には新しい鬼絵馬が積み重ねてある。周囲の壁面にも古いものが釘でうちつけてあるが、一枚の広い板に小さな鬼をたくさん書いてあることが多い。それには少なくとも十四、五、多いのは四、五十もの鬼が書き込まれてあるのだ。竜雲寺の住職秀山さんにきいたら、全治した人が、自分の年齢の数だけ鬼を書いて、お礼に奉納したものだそうだ。

おもしろいことには、頭の神さまだというので、このごろ受験期には、中学や高校生のお参りも盛んにあるという。神さまもお忙しいことだ。

神社の石段の下の小きな店に「鬼絵馬あります」と張り紙がしてあった。一枚十円で、店番をしている少女から買ってみた。この鬼の顔は、ちっともこわくない。むしろあいきょうのある、こっけいな顔だ。古くからある木版に墨をつけて押しているの

だそうだが、木版がちびてしまっているので、押したあとを、さらに筆で補っている。まことに稚拙だが、稚拙な中におかしみがあつてよい。

昭和の初めごろまで手書きで売っていた安部クマさんという、おばあさんの作は、りっぱだったそう。このクマばあさんの作を手本にして木版にしたものらしい。

明治の初めごろ杵築からこの地に移り住んだ人形師があつた。その人が内職に鬼絵馬を描いて売りだしたのが始まりで、この人の描いた鬼は色彩を入れ、鬼気迫るみごとなものだったと、クマばあさんが話していたそうである。

高崎の竜宮さま

高崎山電車停留所から少し西に行くと、高崎山のがけが海に迫って、国道がそのすそを鋭くカーブしている。その先端に歩道から一坪ばかり海に突き出ている場所が特別にしつらえてある。そこに石のほこらがあり、ほこらの前から狭い石段が海に降りている。

「なんのために、こんなところにほこらや石段が…」と、あやしむ人は当節いなくてもいい。毎日別大国道を往来している自動車の運転手でも、あそこにそんなものがあることを気付いている人は少ないようだ。

現在の別大国道が建設されるまでは、あそこに八畳敷きぐらいの大きな一枚岩があり、その岩の下に深い穴があいていた。この穴が竜宮の入り口だといひ伝えられていたのである。

また、この岩を竜宮岩、あるいは雨ごいの岩と呼び、岩の上で竜神に雨ごい祈願をする、いかにがんこな日照り続きでも、雨を恵んでくれると信じられていた。

「府内藩日記」にも、享和二年（一八〇二年）七月に、干ばつ続きのため、王子、春日、住吉、えびすなどの各神社や浄土寺で雨ごい祈願をしたすえ、勢家村では船で竜宮岩に祈願に行き、帰ってから村中渡り拍子で回った。さらに府内の町や村が総休みをして竜宮岩で神楽を奏して雨を祈ったとある。万寿寺の中興第三世乾叟和尚の「禅余集」にも、竜宮岩でたびたび雨ごいをしたことが記されている。

上野円寿寺十四世寛佐が作ったと伝えられている「柴戸山（四極山か）ふりくる雨にしよぼぬれて、夜さら寒いもんじゃ雨じゃもの」の雨ごい歌は、竜宮岩で祈願のさい人々によつてうたわれたもので、大正ごろまでは、まだうたつていたということだ。

大正時代でも、日照り年には、雨を祈る人々が、春日さまから杵原さまにお参りし、さらに高崎山頂に登って火をたき、最後に山をくだって竜宮岩のほくらにお参りしたものだ。その一行に加わった思い出を持つ人は、いまもいるだろう。

竜宮岩が埋められたのは別大道路ができた明治八年。このとき竜神の怒りを恐れてほくらを建て、さらに雨ごい祈願のさい海に降りられるように階段を設けたのだった。

ほくらのかたわらに、風雨に削られたのか、のつぺらぼうになった石碑のようなものがある。何を意味しているものかわからない。この石碑にも、ほくらにも、比較的新しいシメナワが張つてある。田ノ浦かいわいの人は、この付近を竜宮さまと呼んで

いるからときどき張り替えているのだろう。石段をおりてみたら、竜宮岩の続きの岩と思われる巨岩が、石がきの下から海中に入りこんで、数カ所波の上に頭を出している。きよろきよろ見回していたら、波しぶきを頭からかぶった。興味本位の俗人の入来などくそくらえと、竜神が水をかけたのだろう。

お地蔵さま

仏崎の下に縁結びのお地蔵さまがあつたそうだ。

「雉城雑誌」という古い本によると、勢家の神宮寺住職如賢上人の説法を毎日聞きにくる童子があり上人が素性をただすと、「自分は竜王の子である。正休をあかした以上は、上人の説法を聞きに来ることができないから、せめて上人のお顔を朝夕拝したいので上人の像を海岸に置いてほしい」といった。そこで上人は仏工に像を刻ませ仏崎の岩壁の下に建てた。ところが、いつの間にかそれが縁結びの地蔵として信仰を受けるようになった。地蔵のからだを削り取って持っていると思いが相手に届くというので、暮夜ひそかに削り取る者があとを絶たず、ついには地蔵はのつぺらぼうとなつてしまった。それでこれを「面撃地蔵」と呼んでいたというのである。

高崎の竜宮さまと関係があるらしいのもおもしろいが、他人の恋のために身を削ったとは粹なお地蔵さまだ。まだどこかにまつていないかと、捜してみたが見当たらなかった。ひよつとしたら、高崎の竜宮さまの、ほこらのそばの石碑のようなものがそれかもしれない。

仏崎には、もう一つ「灘地藏」と呼ばれるお地藏さまがあった。仏崎の岩上から海上を日夜見つめて海上安全を守っていたものらしく、漁師の信仰をえていたが、明治の末か大正になつてからか位置を移されて、いまは神崎小学校のちよつと上手に安置されている。

竜雲寺の岩くつの中に「切り通しの地藏」と呼ばれるお地藏さまが、世間から忘れられて、つくねんと立つてござるが、これはカンタンのいまの豊山荘旅館の下のがけを背にして立つていたものだ。縁結びや、さまさまの悩みごとをかなえるというので府内の人々の人気はたいしたものだったそうだが、明治の文明開化とともに「いんし（淫祠）邪教」の取り締まりを受けて、竜雲寺の岩くつの中にとじこめられた。衆生が勝手に人気者にしただけでお地藏さま自体は何も「邪教」といわれるおぼえはなかるうから、心外に耐えないにちがいない。

場所は離れるが、参道脇の大山地区にある大山寺の高松地藏は、いまもご安泰で、子連れのお参りを受けている。夜泣き、よだれくり、寝小便など、こどもの悪癖に霊験があるといわれ古くから信仰されているのだ。もとは杵原八幡の宮付きの地藏だったのを、明治になつて大山寺に移したものである。

先日お参りしてみたら、すすけた綿帽子をかぶり、よだれくりが止まったお札に奉納した「よだれ掛け」を十数枚首にかけてござった。

現在のおとなの中には、このお地藏さまの座下を、三度はつて回った経験者もあるだろうとおかしくなったら、とりすましているお地藏さまのお顔にも微笑がわいたような気がした。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第十八章 ●白木かいわい

2007 年 12 月 14 日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武將と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。